

江戸における詩人波響

高木 重俊

一
蠣崎波響は江戸後期の北海道松前藩の家老で、「夷酋列像」(一九八四年、フランスのブザンソン美術館で原画十一枚が発見された)を代表作とする画人として知られるほか、五百首を超える漢詩を残す詩人でもある。彼は、文学や芸術に対する愛好の波が全国をおおった時代に、現実政治と詩画芸術の二つの世界に足跡を印した北辺の文人政治家なのである。江戸時代史の記述上かならず取り上げられるほどの著名人ではないが、江戸後期の芸術文化の高潮の状況、さらに、それを支えた人々の文化意識をうかがう上で、一つの典型となり得る人物と言つてよい。

今回の中国文学学会函館大会では、波響にとつて重要な活動拠点であった江戸において、漢詩人としていかなる創作活動を展開したか、その一端を垣間見たい。

二
蠣崎波響は、明和元年(一七六四)五月、松前藩十二世藩主資廣の第五男として生まれ、幼名は金介、諱は廣年、波響は号である。二歳のとき、将監を名跡として藩の家老職を担う蠣崎家の嗣養子となった。幼少期から、藩家老であり藩随一の碩学であった叔父松前廣長の薫陶を受け、廣長は江戸で学問・絵画の修業をさせた。十八歳で家老職見習いとなった波響は、二十三歳で初めて上洛し、大坂の木村兼葭堂を訪ねたりして上方の風気を満喫する。詩人波響の下地は、全四次にわたる上洛と、かの地における文人たちとの交遊によって形成されたのである。

寛政元年(一七八九)五月、北海道東部のメナシ・クナシリでアイヌ蜂起が起こり、数ヶ月後に平定された。松前藩はその平定に尽力したアイヌの領首十二人を松前に招き、蠣崎波響に各人の肖像を描かせた。これが「夷酋列像」である。寛政三年(一七九一)、波響は列像図を携えて上洛する。それは時の光格天皇の叡覧を得、都の人々を驚嘆させた。波響はこれを機縁として、釈慈周(号は六如、一七三四―一八〇二)・赤松滄洲・皆川淇園・高山彦九郎・积大典・西山拙斎・积慈延(号は大愚)・三宅嘯山ら京都

の一流文化人の知遇を得た。とりわけ高名な詩人であった六如とは「忘年之交」を結ぶに至る。

寛政六年（一七九四）、第三次上洛。この時は菅茶山・楠南谿・伴高蹊・村瀬榜亭らの知遇を得る。菅茶山（一七四六—一八二七）は備後神辺（現広島県福山市）の人で、江戸後期を代表する詩人であり、六如が歿してのち、波響は漢詩の師として生涯敬慕する。この年の八月、波響は六如・茶山・南谿・高蹊・大原吞響らと伏見の巨椋池で月見の舟遊びをした。波響にとつて重大なイベントであつた。

寛政十一年（一七九九）、第四次上洛。六如を白雲山寺に訪い、ともに春を訪ねて近郊をめぐり、両者の交遊はいよいよ深まつた。その二年後の享和元年（二八〇一）、六如（六八歳）・松前廣長（六五歳）・生母文子（六六歳）ら親しい人々が歿している。

文化元年（二八〇四）六月末、江戸の柴野栗山邸で菅茶山と再会。七月初、茶山を中心に江戸在住の犬塚印南・伊沢蘭軒・木村文河・今川槐庵・鉏雲泉らと墨田川で花火見物の舟遊び。波響は「墨水舟中図」を茶山に送っている。

文化四年七月、松前藩は奥州梁川（現福島県伊達市）へ譴責的転封を命ぜられ、五年四月、波響は執政家老として君主に先がけて梁川に赴く。のち、文政四年（一八二二）

十二月に幕府から松前復領を許され、五年三月に故地松前の土を踏むまで、松前藩は足掛け十五年にわたつてこの地にあつた。初めての経験である農業による藩財政の維持、悲願となつた松前復領のための政界工作など、立ちほだかる困難の中で筆頭家老波響の苦闘は続いた。彼は梁川と江戸とを往復しつつ藩政の責任者としての任務を全うした。藩が松前に復帰した文政六年（一八二三）三月、波響は家老職を退き、同九年（一八二六）六月に世を去る。享年六十三歳であつた。

三

江戸における波響の文化活動は、現存資料からすると、多くは文化人サークルの中で行なわれた。彼の名が初めて現れるのは文化二年（一八〇五）春に刊行された『名花交叢』で、編者は中田繁堂、序は山本北山、書は中井董堂、跋は大窪詩佛である。名花三十客を選んでそれぞれに姓名と字号を与え、七グループに分けて図に描く。四清図（蠣崎波響）・三貴図（田中朗卿）・八仙図（中田繁堂）・六妍図（喜多武清）・四逸図（横田汝圭）・梵侶図（酒井抱二）・釣侶図（谷文晁）である。そしてこの三十種の花にちなむ唐土の詩人の七言絶句を各図に配する。いわば詩画混交の



趣味本である。波響の四清図（梅・桂・菊・水仙）は、七つの図の第一に置かれる。波響は画人として江戸の著名画家に伍していたのである。

文化四年二月刊の菊池五山『五山堂詩話』巻一に、竹所吟社の活動が紹介される。竹所吟社は幕臣対馬守牧野成文が主催し、谷麓谷・中田察

堂・蠣崎波響・野沢酔石・山地蕉窓らが構成員であった。蠣崎波響に関しては、「波響、名は廣年、松前の公族にして尤も画に工なり。詩は則ち六如に学び、殊に淵源有り」と記述され、次の、

〈題圖〉

山抱青溪溪抱村
桑麻雞犬小桃源
滄雲界断人間路
不許微租来叩門

山は青溪を抱き 溪は村を抱く
桑麻 雞犬 小桃源
滄雲 人間の路を界断し
微租の来りて門を叩くを許さず

〈聞鵬〉

織月磨鎌夜四更

織月 鎌を磨く 夜の四更

乱雲堆裏影微明 乱雲堆裏影微かに明らかなり
杜鵑彷彿驚眠過 杜鵑 彷彿 眠りを驚かして過ぐ
認得新声第二声 認め得たるは新声の第二声
という二絶句が取り上げられている。平凡な作品である。

文化五年刊の『五山堂詩話』巻二には、文化三年新春の竹所吟社の発会で行なわれた「梅花十詠」の集まりが紹介されている。参加者は先程の中田察堂・野沢酔石・蠣崎波響・山地蕉窓・谷麓谷・牧野竹所の六名に、海野螻齋・中井董堂・大窪詩佛を加えた九名で、各人が梅の十の姿態を「梅蕾・未開梅・乍開梅・半開梅・全開梅・未謝梅・欲謝梅・半謝梅・全謝梅・梅夷」という小題で詠じるもので、波響の「梅蕾」は、

品字点成十字枝 品字 点成す 十字の枝
養来日日待花披 養来 日々 花の披くを待つ
審中手試火文武 審中 手づから試む 火の文武
無限陽和暗自私 無限の陽和 暗自に私す

とうたわれている。詩会でテーマにしたがって作詩する趣味の世界である。この会における総数九十首の作品は、のちに山本北山の序文を添えて『梅花十詠』として私刻され、その一冊が函館市立中央図書館に収蔵されている。波響は江戸において漢詩人としても著名であったのである。

清の袁枚（二七一六一—一七七七）は古文辭格調派の擬古的形式主義を排し、性情（こころ）に沁み入る自然な感動を自由に表現するという性靈説を主張した。摺斐高『江戸詩歌論』によれば、袁枚の『隨園詩話』は寛政三年（二七九一）に長崎に將來され、寛政五六年にはすでに日本の詩人たちに読まれており、菊池五山の『五山堂詩話』は、『隨園詩話』の形式を模した、性靈説を鼓吹する前衛的文芸批評誌だった。詩人波響も性靈詩風の流行のただなかで創作活動に参画していたのである。

しかし、江戸の都市文化の爛熟を背景に、詩の制作が文人ネットワークの中で集団的に行なわれる風潮が定着すると、自然な感動を自由な表現に委ねるといった性靈派の主張も、発想や表現の狭隘化を招き、都市型性靈派とも言うべきものに変容してゆく。波響はそれに気づいていた。奥州梁川に移って七年目の文化十一年（一八一四）九月、波響は江戸出府中の菅茶山に長文の書簡を送り、詩の添削を要請する中で、特に「江戸風の臭気」を除いてくれるよう強調したのもその自覚による。

中期の波響が都市型の性靈詩風にうつつをぬかしている

たかというと、そうではない。「癸亥冬十月、至江戸道中、

寓宿津軽原子村即事」は、享和三年（一八〇三）十月に江戸に向かう途中、津軽の原子村（現青森県五所川原市）に一夜の宿を借りた即興的作品で、時に波響は四十歳。

山中日暮回図程 山中 日暮れて 程を回り直し

漸請田家旅次成 漸く田家に請いて 旅次を成す

雪為替燈来牖映 雪は燈に替るが為に牖に來りて映じ

川因兼井傍扉栄 川は井を兼ねるに因りて扉に傍りて栄ゆ

奴争孤褥繩床睡 奴は孤褥を争いて繩床に睡り

栄ゆ媪煖枯羹粥鼎鳴 媪は枯羹を煖きて粥鼎鳴る

却喜婪翁没疎意 却た喜ぶ 婪翁 疎意 没く

鄰鄉跨馬買醪行 鄰郷に馬に跨りて醪を買わんと行く

初冬の道中、山中で日が暮れて道を取れず、農家に頼み込んで旅の宿りとした。灯火がわりの雪が窓につきもり、井戸を兼ねる川が戸口の前を流れる。供の者たちは一枚の蒲団を引っ張りあつてむしろに眠り、老婆は粥鍋を炊いてくれる。老翁は馬で隣村までどぶろくを買いに行つてくれる。

この詩には、旅の苦勞を忘れさせる農家の老夫婦の人情が描かれる。第五句の供の者の寝姿はユーモラスである。江戸の都市型性靈派の新星として名を挙げつつあった波響は、一方ではこのような作品を作っていたのである。

次の「山村秋事」は、梁川における田園詩である。

山邊孤村路傍泉 山は孤村を邊り 路は泉に傍い

干林錦繡帶晴煙 干林の錦繡 晴煙を帯ぶ

瓠蔓將老匍茅宇 瓠蔓 將に老いんとして茅宇に匍い

鴉鶻苦飢鉏芋田 鴉鶻 飢えに苦しみて芋田に鉏す

翁補破窓糊故紙 翁は破窓を補わんと故紙に糊し

婦滿鹿褐挾新綿 婦は鹿褐を漙いて新綿を挾む

黃昏吠客籬辺犬 黃昏 客に吠ゆ 籬辺の犬

知是行商売茗還 知る是れ行商の茗を売りて還るなるを

この詩も、桃源郷にも似た田園の自然と人間が、暖かな眼差しで描写されている。自然と人間を活写する、これこそが真の性靈詩風なのである。

五

蠣崎波響は、もとより漢詩制作を生業とする職業詩人ではない。したがって、彼の作品が職業詩人や学者のそれと比べて、全てが高い水準にあるとは言えない。彼は何よりもまず藩政を領導する家老であった。また、画人として京都や江戸で名をあげたが、彼にとって画業は職業画人としての身過ぎ世過ぎではなかったものの、さりとて風流人の余技でもなかった。とくに梁川時代、彼は多くの絵を描い

て販売し、松前復領の工作資金や藩財政の一部に充当せざるを得なかった。彼は家老の職務に劣らないほど画業にも専心したのである。では、その波響にとって詩はどんな意味を持つものであったか。それはおそらく、公務の煩忙の中で風流に身を置く充実感、束縛から離れて自由人として生きる充足感につながるものであっただろう。波響にとって詩作は名利とは無縁の自己解放の行為であり、彼はそこに人間や自然を活写する精神を込めたのであった。

〔参考〕

中村真一郎『蠣崎波響の生涯』（新潮社、一九八九年）

高木重俊『蠣崎波響漢詩全釈』（幻洋社、二〇〇二年）

高木重俊『蠣崎波響漢詩研究』（幻洋社、二〇〇五年）

（北海道教育大学）